

「主イエスの弟子たち」

2014年07月29日

マルコによる福音書3章13節～19節。「イエスが山に登って、これと思う人々を呼び寄せられると、彼らはそばに集まって来た。そこで、十二人を任命し、使徒と名付けられた。彼らを自分のそばに置くため、また、派遣して宣教させ、悪霊を追い出す権能を持たせるためであった。こうして十二人を任命された。シモンにはペトロという名を付けられた。ゼベダイの子ヤコブとヤコブの兄弟ヨハネ、この二人にはボアネルゲス、すなわち、「雷の子ら」という名を付けられた。アンデレ、フィリポ、バルトロマイ、マタイ、トマス、アルファイの子ヤコブ、タダイ、熱心党のシモン、それに、イスカリオテのユダ。このユダがイエスを裏切ったのである。」

主イエスは山に登られた。イスラエル人は、海はカオス、恐怖の混沌としてとらえたが、山は神が臨在する聖なる場と見なした。「シナイ山」はモーセが十戒を受けた代表的な山の山である。主イエスは、神が臨在する山に登って「これと思う人々」を呼び寄せると、彼らはそばに集まって来た。「これと思う人々」とは、どんな価値基準であったのだろうか。よくは分からない。言えることは、呼び集められた弟子たちは皆、無学なただの人々であったということである。ペトロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネはガリラヤ湖の漁師であった。彼らは読み書きができない。ガリラヤ人気質を受け継いだ素朴で、勇敢で、律儀で、血の気の多い壮年、青年たちであった。ヤコブ、ヨハネは「ボアネルゲス（雷の子ら）」とニックネームがつけられているから、怒ることに早い激しい気性だったのであろう。

フィリポはギリシャ名である。ユダヤ名はない。両親がギリシャ文化に憧れ、息子にギリシャ名をつけたのであろうか。彼は、理知的な現実主義者である。バルトロマイについては記述がない。マタイは徴税人であった。徴税人は「罪人」と見なされ、イスラエルの共同体から排除されていた。主イエスに呼び出され、人間であることを認められ、喜んで従っていった。トマスは、復活を信じないと言ったので「疑い深いトマス」と言われているが、主イエスと「一緒に死のうではないか」と言った人で、愛に殉じる心の持ち主であった。アルファイの子ヤコブ、タダイについての記述はない。熱心党のシモンも記述がない。「熱心党」はローマの支配に反抗し、懐に短刀を隠し持ち、ローマ兵に隙あらば、殺害する熱烈な愛国主義者であった。シモンにとっては、徴税人マタイはローマの手先で、殺したい人間であっただろう。そのシモンとマタイが共に弟子になっていることは興味深い。弟子たちは似た者同士ではなく、相反する立場の人々を含んでいた。このことが、主イエスの宣教団を生き生きと活気づけていたのではないか。

イスカリオテのユダも「これと思う人々」として呼び出されている。ユダが主イエスを裏切った。「裏切った」という言葉はギリシャ語では「売り渡した」である。聖書は、売り渡したユダへの憎しみが増幅され、悪人として描かれている。謎の多いユダに関して、諸々の説がある。しかし、主イエスの十字架によって、ユダも赦しの中に置かれていることは確かである。ユダと同じ心の闇を持つ私たちも救われているからである。

主イエスの弟子たちは無学なただの人、そして多様な人々であった。十字架の前で一度は挫折したが、復活の主イエスに出会い、呼び寄せられた使徒の使命を全うする者に変えられていった。呼び出された者は、神が責任を負ってくださるということである。